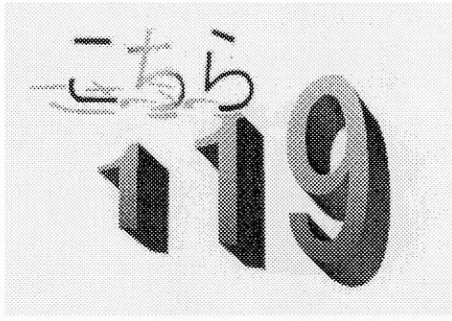
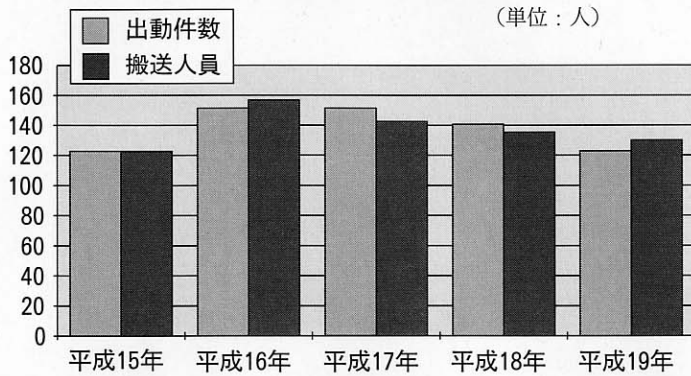


平成19年救急統計

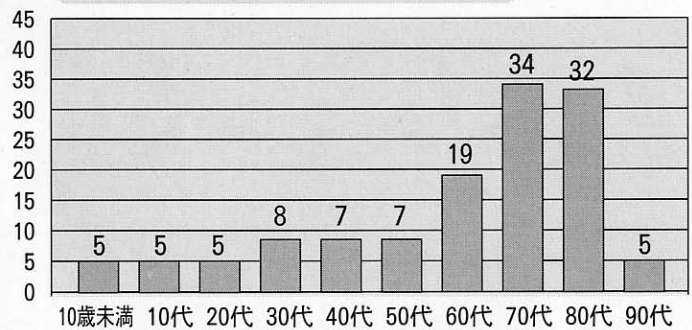


◇救急出動件数及び搬送人員(グラフ1)



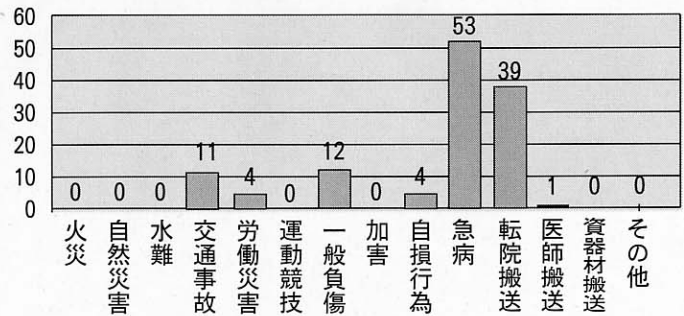
平成19年中の滝上町の救急出動は124件(グラフ1)、搬送人員は127人で昨年より共に減少しました。特徴としては、年代別で見ると60代から80代の高齢者の搬送が多く(グラフ2)、性別では男性(77人)の方が多く搬送されました。

◇年代別搬送人員(グラフ2)

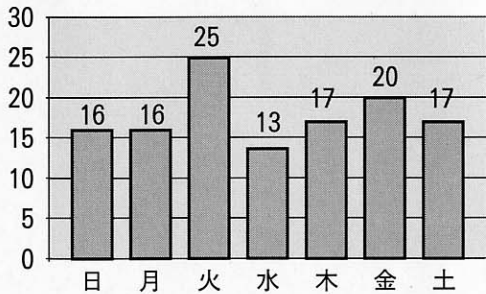


また、救急の事故種別(グラフ3)では、急病・転院搬送(病院から他の病院へ救急搬送するもの)の順に多く、全体の約70%を占めており、続いて一般負傷や交通事故といった出動があります。なお、曜日別(グラフ4)では火曜日の救急車の出動が多くなっています。

◇事故種別救急出動件数(グラフ3)



◇曜日別出動件数(グラフ4)



もしものために

滝上消防署一般電話番号(0158-29-2049)を携帯電話に登録しておきましょう。携帯電話より119番通報すると紋別消防につながり、滝上消防に転送されます。



コンビニ受診で医師は疲弊しています

全国で自治体病院の医師不足が深刻になっています。地方の医師不足の背景のひとつは国が進めた初期臨床研修医制度によって大学に残る研修医が減ったためと言われています。

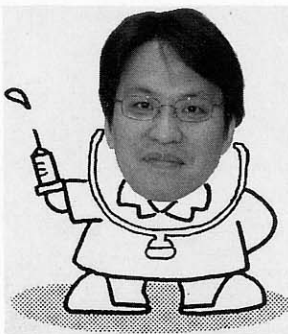
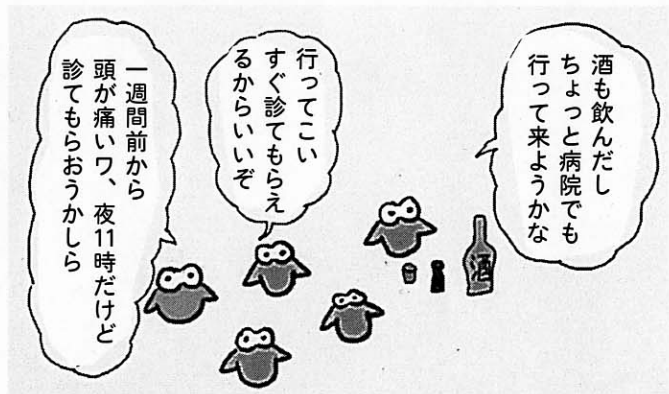
しかし、実はこれだけが原因ではないと言われています。北海道新聞に掲載されている「あすの医療は」という連載記事で、城西大学の伊関友伸准教授は病院に対する住民や行政側の意識の問題が本質にあると述べています。住民側で最も問題になっているのが緊急性の低い患者が夜間や休日に安易に受診する救急の「コンビニ化」です。コンビニ化とは病状の軽い患者がコンビニエンスストアで買い物する感覚で安易に休日でも深夜でも病院を利用することを言います。これが医療業界や救急搬送を担当する消防で大きな問題となっています。

財政破綻した夕張では1週間前から膝が痛いと言って、救急車で深夜に病院に来る患者は少なくなかったそうです。患者さんは病院がいつでもどんな患者でも受け入れるのは当然と思うかもしれませんが、少ない人数で1日中働いて、そのまま当直体制で深夜2時でも3時でも患者を診て、朝になればそのまま通常勤務となる医師にとって、1週間前から膝が痛いと言って深夜にきた患者を診させられれば、医療に対するモチベーションは一気に

下がってしまうこととなります。少なくとも昼間に受診できなかったのかと思うのは当然ではないでしょうか。

兵庫県立柏原病院では昨年、地元のお母さんたちが「小児科を守る会」を立ち上げ、人口7万人の街で5万3千人の署名を集めて知事に医師派遣を要請したそうです。画期的なのは単に「医師よこせ」という要望ではなく、「コンビニ受診」を控えて医師を大切にしようと呼びかけたことです。

前述の伊関准教授は、医師と住民のコミュニケーション断絶による「溝」を埋めることが医療崩壊を防ぐことにつながり、行政の啓発も必要だが住民側も人任せにせず自ら動くことが重要だと述べています。行政側は現場の医師の声を聞き医師が働きやすくなる改革を進めていくこと、患者は医療について学び、医師がやりがいを持って働ける環境を支えていくことが大切だとも述べています。私はこの記事を読んでなるほどと思いました。



現在、医療崩壊している地域はこのような意識が働いていない地域であり、今後、生き残る自治体病院は間違いなくこのような意識が働いている地域であると思います。5年後10年後の滝上はどうなっているでしょう。それを決めるのは住民と行政であり、それに答えるのが医師であると思っています。

滝上町国保病院長 桂 卷 正